

敦煌仏教研究の現状

上 山 大 峻

一 研究のはじめ

わたくしが専門分野としております敦煌のことについて何か話をせよとのことで、簡単な気持ちでお引受いたしましたが、この会が伝統ある意義深い会であることを知り、大変恐縮いたし緊張している次第でございます。

限られた時間内でどこまでお話できるか分かりませんが、敦煌出土写本の研究が仏教学にとってどういう意味をもっているかということ、そして、今日その研究がどのあたりまで進んでいるか、またどういふ問題をかかえているか、そのようなことをお話したいと思っております。時間の関係で、大ざっぱなところでお話することになるかと思いますが、お許しいただきたく存じます。

ご承知のとおり、王道士が敦煌の莫高窟の第十七洞に古い經典類が詰まっていることを発見したのは一九〇〇年のことであつたと言われております。その後、イギリスのスタイン（一八六二—一九四三）、フランスのペリオ（一八七八—一九四五）などがそこを訪ねまして、それぞれ資料を持ち帰ってまいりました。日本の第三次の大谷探検隊（吉川小一郎氏と橘瑞超氏）がそこを訪ねたのは一九二二年でありました。その時は、ほとんどのものは皆が持って帰ったあとでしたが、それでも約六〇〇点ぐらいの古写経を隠匿していた王道士から買い取るなどして持ちかえりました。この

大谷探検隊を主宰したのが西本願寺の二十二代門主である大谷光瑞師（一八七六～一九四八）でありまして、そうした因縁で大谷探検隊の蒐集品の研究を中心とする西域研究が龍谷大学の責務のようになってしまいました。

ところで、私がこのような敦煌など西域出土の写本の研究にかかわりはじめました事の起りは、大谷大学にもその時の同僚の方がおられますが、昭和三十年（一九五五）に、大英図書館やインド省図書館に保管されておりますスタイン蒐集の敦煌写本全点のマイクロフィルムが榎一雄教授、山本達郎教授の尽力によって日本（東洋文庫）に将来され、その焼付写真が京大の人文科学研究所にも設置され、その目録を作ろうということで研究会が組織されたことにはじまります。これは想像ですが、どうもはじめこの資料に関心をもたれたのは東洋史の先生方で、古代の戸籍とか律令の古逸断片などが多く発見できると期待されたらしいのです。ところがどの写真の束を開けてみても出てくるのはお経ばかりです。これなら目録を作るには仏教の専門家にさせた方がよいということになり、大谷大学や龍谷大学にも話が来たのではないかと思います。私はその時、大学院の修士課程の一年生でしたが、ある日、芳村修基という先生に、たまたま廊下でお会いしたときに「お前、人文科学研究所に行ってこい」と言われ、研究会に参加したのがそもそもの始まりであります。

人文科学研究所に行ってみますと、大先生がたが真剣な顔をして写真を調べておられるのです。私は実は寺院の生まれでして、仏教にとって大事なことは、私が如何に悟るかということ、お経はその為に学ぶものだと思っておりました。ところが、ここでやっていることは、なるほどお経を相手にしてはいませんが、小さい断片が『大正新脩大藏経』のどの経の何頁に当たるかということを調べれば作業にはかなりません。『法華経』にしても『大般若経』にしても、既に立派な經典があるのに、古い小さな破れた断片を、大事な時間を使ってなぜ調べなければならないのか、それが悟りの問題とどう関係するのかということが納得できませんでした。正直なところ腹のなかではその作業を軽蔑しておりました。したがって随分不真面目なことであったと思っておきます。しかし、いやいやながらも写本を調

べてゆきますうちに、色々なことがわかってまいりました。

二 中国仏教と同じでない敦煌の仏教

研究会で私が調査を分担したのは、いわゆる「論疏」に分類されるものでした。『法華経』や『般若経』などのちゃんとした仏典は既に先輩たちが担当されていて、目ぼしいものが無かったせいでもあります。「論疏」として分類されているカードを集めてみますと、ほとんどに「不知題」と書かれています。すなわち、たしかに唯識や律などの論疏であるとは推定できるけれども、何であるのか同定できないというものです。漢文で書かれた論疏ですから、当然、中国仏教で重要な『成唯識論』とか『法華玄義』などに一致するであろうと予想していましたのに、そのようなものは殆ど見あたりません。ちゃんと書名や撰者が書いてあるものは稀で、ほとんどは何かの論疏だが、それが何なのか分からないというような断片ばかりなのです。私は仕方なく、しばしば名をみる曇曠と法成の著作の写本を、大きいものも小さい断片も出来るかぎり集めてみることにしました。そうしますと、曇曠と法成の写本の特徴が自ずから浮き上がり、小さい断片もその特徴の類似から、何であるかが殆ど分かってまいりました。筆蹟から、もとは連っていたものだと分かるものもあります。時々、書写した人の名や年代を書いた奥書があるものもある。それらを基準にして、ずっと並べてみますと、そこにおのずから曇曠と法成という人物の経歴が浮かびあがってきました。

その曇曠の著作に『大乘二十二問』というものがあります。もちろん中国本土には伝えられなかった本です。『大正新脩大蔵経』八十五巻には入っていますが、それは敦煌の写本から収録されたものです。相当数の写本が発見できますので、多くの人が写し、学習していたものなのです。それには序文が附いていて、それに「聖顔」とか「聖情」とかの言葉がでる。すなわちこの本は、誰か「聖」なる人より質問をうけ、それに答えたものであると判断できるのです。従来はその「聖」なる人は、この本を最初に注目した久野芳隆という学者により、丁度そのころ中国の天子で

あつた代宗のことであろうと推定されておりました。私は東洋史のことはよく分かりませんが、たまたま、その頃、研究会のお世話役でありました藤枝晃先生にお見せしましたら、その頃の敦煌はチベットに支配されていて中国と行き来はなかつたはずである。それに、中国の長安には偉い学者が沢山いるはずなのに、天子がなぜ田舎の敦煌の僧侶にわざわざ質問をするのか、この「聖」なる人は、その頃敦煌を支配していたチベットの贊普ではないか指摘されました。漢文で書かれたものだから、中国の歴史で考えなければならぬと私も久野先生も思いこんでいたのです。ポロ紙が如何に重大なことを秘めているかということ、中国の歴史書に全く書かれていない事実が出てくるということ、このことに恥ずかしながらその時初めて気がついたようなことでした。

私の敦煌写本の研究のやり方は、曇曠や法成の写本の整理のことで申しましたように、同じような写本が沢山ある場合、それをとにかく全部集めてみる。そしてそこに浮かびあがってくる歴史的事実を汲み取ってゆくという、いわば帰納法的方法です。そのような同類の写本のグループは幾つかありますから、そうして分かったことを連結してゆけば、だんだんと敦煌の地域に展開した仏教の状況が判明してくるのではないかと思つたのです。今もこの方法で研究を進めています。が発見は、不明な写本をどう整理するか、の苦肉の策でした。こうしたことから敦煌写本の調査の仕方や重要性が分かってきまして、次第に敦煌研究が面白くなつてまいつたようなわけでございます。

三 古逸仏典の蒐集

敦煌の資料が発見されますと、たちまち世界から注目されましたが、その理由はいろいろありまして、まず書道家が関心を示しました。実は、それまで中国には紙に書かれた古い時代の筆蹟は残っていませんでした。書道の手本にするのは石碑などからの拓本であつたのです。それが、敦煌をはじめ西域から四世紀、五世紀ころの隸書風の筆蹟の写本が発見されたのですから、大変貴重な資料として迎えられるのでした。中村不折という書道家は、多くの発掘古

写本を集められて、現在「書道博物館」に所蔵されております。

それから東洋史の方からの研究対象となりました。たとえば、仁井田陞先生は中国では失われていた唐の律令の条文をいろいろな文献から蒐集し、「唐律」を復元した名著『唐令拾遺』（一九三三）を刊行されましたが、その資料を敦煌写本からも得られました。このように、中国ではすでに散失してしまった貴重な文献が敦煌など西域資料のなかに保存されている場合があります。東洋史の学者がたの関心をひきました。

また、同じ東洋史関係の分野になりますが、中国の均田制などの実際に施行された古い文書が見つかり、このようなものが当時の具体的な社会経済制度を明かにするものとして注目されたのでした。

それから言語関係です。敦煌写本の構成は漢文だけではなく、チベット語、ソグド語、ウイグル語、コータン語など当時の中央アジアで用いられた言語の文書が混ざっていました。特にチベット語資料は、一時期チベットに占領されていたこともあり、ほぼ漢文写本に匹敵するほどの多量の写本が保存されておりました。これらは言語学者からの興味をひきました。

ところで、仏教学者からの関心ですが、大谷光瑞師の着眼を別にすれば、本格的に注目したのは矢吹慶輝先生でしょう。先生はロンドンに行かれ、スタイン蒐集の敦煌写本に眼を通して、「大藏経」に入っていく、これまでの仏教学者の知識にない未知な仏典の存在していることに注目し、特にそれらを選んで写真にとり日本に紹介されました。それらは録文して丁度編纂されつつあった『大正新脩大藏経』の第八十五卷「古逸・疑似部」（一九三二）に収録され、更に『鳴沙余韻』（一九三八）という写真版を「解説」を付して出版されました。また矢吹先生は、そうした古逸資料の中の三階教関係の写本に注目し、中国で禁教となって典籍の失われていた三階教の資料の復元をされ、大著『三階教の研究』（一九二七）を発表されました。

矢吹先生の紹介された古逸の仏典は仏教学者の興味をひきましたが、なかでも最も強く関心をもったのは禅宗関係

の学者でありました。なぜかと言いますと、中国の禅宗は五祖弘忍のあと六祖慧能の南宗禅と神秀の北宗禅とに分裂し、結局、北宗禅は排されて南宗禅が後世にのこったのですが、その北宗禅系統のものは典籍まで失われてしまっていたのです。ところが、失われたはずの北宗禅の資料が敦煌写本のなかに見つかったのです。北宗禅の灯史である『楞伽師資記』は代表的なものです。これらによって分からなかった北宗禅の実態を知ることができるようになったからです。宇井伯寿先生が『禅宗史研究』（一九三五）の中に収録されている「北宗残簡」はそうした北宗の資料を集められたものです。禅の関係の写本は、北宗禅資料だけでなく、神会など南宗禅系のものも存在しております。禅の方々は今なお敦煌資料に対して強い関心をもたれ、古逸の禅文献の蒐集を続けておられます。

そういう古逸の仏典は、矢吹先生などが多くを蒐集されましたが、やはり未だ残っております。それらを集めますと、『大正新脩大藏経』二冊くらいにはなるのではないのでしょうか。中には重要な問題を浮き上がらせるものがあります。例えば、敦煌の資料ではありませんが、「百済康義先生がトルファン出土の古写本の中に、『無量寿経』の断片を発見されました。ところが、この部分は現存の『無量寿経』の七欠の一ではないかと推定されました。そこで百済先生は、もしかしたら、これは五存七欠といわれる『無量寿経』の七欠の一ではないかと推定されました。もちろん推定の域にとどまりますが。また、これもトルファン出土写本ですが、『注維摩詰経』の单注本の写本が発見されました。ご承知のように『注維摩詰経』という本は、鳩摩羅什はじめ、門下の僧生、僧肇などが『維摩経』に対してそれぞれ注釈を書いていたのを後に集めて一冊に編集したもののなのです。だから原本になる本は当然あったはずですが、無くなっていたのです。その本が見つかったのです。これは「肇曰」のところの文に一致しますので、僧肇の注釈した本であるわけですが、この資料によって、单注本の存在を実証することができました。そのような資料が、たんねんに探しますと、まだいろいろ見つかるに違いありません。

こういう古逸仏典が敦煌写本などの西域資料から回収するということは、大変おおきな成果ですが、それは要する

に中国仏教で起っていて、今まで失われて不明になっていたことを、敦煌資料によって補完するという作業です。従来は、殆どこの意味だけで敦煌資料の役割を見ていたと言っていていいでしょう。ところがこのやり方が大きく変化してまいりました。

四 研究方法の変化

そのきっかけは、敦煌写本のフィルムが将来され、写真で敦煌写本の全体が見れるようになったことからです。

禅の關係の学者は別として、それ以後、他の仏教学者からの敦煌写本に対する関心はあまり広がってゆきませんでした。それは、禅以外の宗派に属する学者にとっては、矢吹慶輝先生の紹介された敦煌資料の中にも、従来の仏教学の眼から見て世間を驚かせるような貴重な古逸の資料が見つからなかったからです。ところで、はじめに申しましたように、昭和三〇年にスタイン蒐集の敦煌写本全点の写真が将来されました。ここで日本にいながら、はじめて敦煌写本の姿を見ることができるようになったのですが、やはり失望せざるをえませんでした。期待していたような文書とか古逸の經典は極めて稀で、殆どは『大般若經』とか『法華經』とかのよく知られた經典の写本ばかりなのです。当てがはずれてしまいました。東洋史關係の人も、期待していたような資料は殆ど見あたらず、仏典ばかりであることに失望されたことだと思います。

珍本の発見はあまり期待できませんでしたが、写真が見られるようになって、それまでは活字で内容を知るだけであつたのが写本の形を知ることができるようになりました。それに、矢吹慶輝先生が選んだものでしか敦煌写本を知ることができなかったのが、スタイン蒐集写本の全点が見れるようになったことよつて、全体の構成が分かつてきました。まず、写本の九〇パーセント以上が仏典であつたのです。あらためて、敦煌が仏教都市であること、藏經洞にあつた写本が仏教活動の遺品であつたことに気づいた次第です。

また、写真で写本のすがた形をみることでできるようになって、筆蹟や書写形式などの類型からの年代判定が可能になりました。このことは藤枝晃先生が言い出されたことですが、どういふことかと言いますと、筆蹟は時代時代違っており、たとえ書写の年代が書いてなくても、筆蹟の特徴から大体の時代判定ができるということです。五・六世紀頃の北朝期では隸書体の特徴があり、唐代になると楷書体になってきます。中国との連絡が切れた吐蕃時代になりますと、チベット字を写す木筆を用いて漢字を書くようになります。その特徴から判断すれば、ほぼ三十年くらいのはばで年代の推定が可能であると藤枝先生は言われます。これによって、年代の書いてない、小さい写本の断片でも、だいたい何年頃のものかということが分かるようになりました。そのおかげで、今までは年代が分からないので、資料に用いられなかったような断片でも、それがどの頃に流行ったものかを判断する資料として役立つようになります。資料の有効範囲はぐんと広がることになるわけです。

また、写本の形態的特徴から、大体これは『金剛般若経』だとか『法華経』だとかが分かってくるのです。そうした類型が見分けられるようになったのは、やはり写真のおかげです。そうしたことで、今までは殆ど諦められていた、編年研究や系統分けが可能になったのです。必然的に、今まで知られない珍しい仏典を紹介することが大事としていた敦煌研究の関心が、ここで転換することになりました。藤枝先生は、その分水嶺は、昭和三十一年に編纂された『東方学報』第三五冊の「敦煌特集号」であったと言われます。そのように方法が進歩したり、新しい事実がいろいろと分かってきました。私としまして、曇曠や法成のことを明らかにすることができまして、写本研究のやり方や敦煌仏教研究の重要性が次第に分かるようになってきたわけです。

五 敦煌独自の仏教の展開

まず、申しあげたいのは、敦煌の仏教と長安を中心とした中国中原の仏教とは違う展開があるということが分かっ

てきたことです。隋・唐時代のような中央集権の時代は、地方の文化も中原のものが行き届いている傾向があるのですが、ご承知のように敦煌は、中央と離れていますから、独立国か半独立国の性格をもっておりまして、文化も独自のものが行われることの方が多かったわけです。典型的な例は、八世紀のおわり頃から九世紀の中頃まで吐蕃に占領されていた時期（七八六～八四八）です。ちょうどその頃は、チベット仏教史の方から言いますと、前伝時代という初期仏教導入期に当り、敦煌のチベット支配時代はそれと平行するのです。この時代、大きな勢力をもった吐蕃は敦煌も占領し、そこを「大蕃国」（チベット）の一部として支配していたのです。この時は、従来からの住民や僧侶はそのままでしたから、漢語もひき続き用いられ、仏教も中国仏教が継続していたのですが、一方で、チベットの仏教が入り込み、中国仏教にみられない独自の教学や組織ができてきました。

そういうことがあるうとは露ほども思いませんから、漢文仏典は中国仏教の資料に一致するはずだと一生懸命さがしていたわけです。しかし、漢文で書かれているからといって、それは必ずしも中国の仏教に一致するわけではなかったのです。〈漢文仏典＝中国仏教〉ということが簡単に言えないとしますと、敦煌の漢文仏典を、安易に中国仏教の歴史や教学の範疇で判断してしまうことは危険になってきます。その前にどうしても、「敦煌」ではどんな仏教が行われていたかという、敦煌独自の歴史や仏教の状況を明らかにしておく必要が生じてくるのです。

曇曠や法成の写本の調査は、そのような敦煌独自の仏教を明らかにする有力な手がかりとなりました。曇曠という学僧は、もともと河西地方の出身で、それが長安に出て西明寺で『大乘百法明門論』などの唯識学、『大乘起信論』、それに『金剛般若経』などを学んでいましたが、中央の学界の腐敗を厭い、故郷の建康（張掖）に帰ろうとします。ところが、ちょうど安祿山の乱を契機に吐蕃が跋扈したときで、曇曠はその戦火に追われて、河西回廊を東から西へと追いつた立てられ、七六三年頃までに、遂に最後にのこった敦煌に逃げ込みます。それまでの途中、靈州、涼州、甘州などで『金剛般若経旨贊』『大乘起信論広釈』などの著作をしながら敦煌に入りますが、この敦煌でも『大乘百法明

門論開宗義記」などの幾つかの著作を行い、それらを講義しました。なにしろ、曇曠は最新の長安の仏教学を身につけているのですから、いわば田舎の敦煌の僧侶たちは彼を大変歓迎したに違いありません。それにあって受講者たちが写したテキストが保存されていたのです。それらは、勿論、中原の記録には載っていないことです。

また、最初に紹介したように、曇曠が晩年チベットの贊普から仏教教理に関する質問を受けた事件は注目すべきことです。敦煌が吐蕃に占領されるという特殊事情のなかで起きたことで、当然、中国仏教史には見られないことです。

次に法成のことを挙げておきたいと思います。この人物も中国の記録には見られない人物で、敦煌写本によって初めて名を知られました。最初にこの人物に注目したのはペリオです。かれは、すでに一九〇七年にはじめて莫高窟を訪ね、藏経洞で調査をしているときにその重要性に気づいたようで、本国におくった手紙の中で「法成」はチベット大藏経に漢文からチベット訳する翻訳者として名を見るチュードップ (Chos grub) と同一人であろうと推定しています。漢文の写本では、法成の名は「大蕃国大徳三藏法師沙門法成訳」や「沙門法成集」などと書かれており、チベット語写本では *Shu chen gyi lo tsa ba ban de go chos grub* のように書かれています。この人物は、漢文仏典をチベット語に訳しているところから、チベット人と思われていましたが、私は実は漢人だと推定しました。ちなみに、チベット文献に見られる「go」ですが、これを、先輩の学者は「ゴエ族」とか「ゴエ寺」とか解釈されていました。しかし、これは漢人姓の「呉」のことで、法成はチベット人ではなく漢人で「呉法成」です。なぜ漢人が、チベット訳できたのかということですが、後に申しますように、法成は八五九年頃亡くなっています。そうしますと、七八六年の敦煌陥落のころは相当長生きしたとしても未だ幼年期です。そのころからチベット人がチベット語とともに敦煌に入り込みました。そうした環境の中で、漢人でありながらチベット語にも長した人材が育ったとしても不思議はありません。ちなみに、敦煌写経の中に『無量寿宗要経』という經典が、漢文のものとチベット文のものとで沢山あり

ました。この經典を寫写することの功德から、贊普の供養などで大量に寫されたものが保存されていたのですが、これには最後に寫写人の署名が見られます。漢文のものは漢字で署名されていますが、チベット文のものはチベット文字です。ところがその殆どが、実は漢人姓名の音写なのです。これによって吐蕃仏教の寫經事業に沢山の漢人が動員されていることが明らかになりました。どうもチベットは、自国の仏教の興隆事業に役立てるために敦煌を占領し、その人々を寫經事業などに利用していたようです。もっと言えば、最初から仏教都市敦煌は、吐蕃から狙われていたところではなかったかと思えます。吐蕃が敦煌を占領するについては、この土地のもつ仏教的資源、すなわち中国仏教界の人や經典などの物をそのまま手中にし、自国の仏教興隆に役立てようという意図があったと思われまふ。法成はそういう状況の中で、漢語とチベット語の双方に通じていたことから抜きざされて、チベットの翻譯事業に「大蕃国大徳三藏法師」として起用されていたのです。

法成は、円暉の著作である『入楞伽經疏』や円測の『解深密經疏』など二十点の漢文仏典をチベット訳をしています。その内には、チベット大藏經だけに入っているものもありますが、敦煌から新しく発見されたものもあります。また、彼は、新しくインドから入ってきた仏典を漢訳して、漢人僧に紹介する役もつとめたようです。このようなことは、敦煌がチベットになっている時のことですから、中国の記録には当然のこりません。といって、チベットの方にもチェードップの名で翻譯された幾つかの仏典をチベット大藏經にのこすのみで、「チベット史書」にも全く記録されていないことなのです。

法成は、翻譯だけでなく、『大乘稻芊經隨聽手鏡記』や『大乘四法經広積開決記』など学術的な著作ものこしており、晩年には『瑜伽師地論』の講義もして、その講義録がのこっておりますが、それらを見ますと、漢文で書かれてはいますが、当時のインドからの新着の仏教知識を取り入れて、それを中国仏教の知識と合わせて独特な学問を作りあげているのです。しかも、文章の解釈などにチベット語やサンスクリット語との対照をおこなうなど現代の原

典研究の方法をすでに採用しています。ちなみに、その中国仏教の知識は曇曠のものを承けております。年代からみて、曇曠の弟子くらいから学んだでしょう。そのような法成の著作は、漢文のものであっても中国仏教と同類だとは見なすことができません。そういうこともあって、どうしても敦煌の仏教は、中国仏教から独立して考えてゆかなければならないのです。

六 仏教史の検証

敦煌写本から分かってきた重要な事項として、ぜひ触れておかなければならないものに、いま一つ「チベット宗論」のことがあります。ご承知のように、一九五二年にフランスのドミエヴィル教授が『ラサの宗論』(Le concile de Lhasa) という本を出され、敦煌写本のなかに見つけられた『頓悟大乘正理決』を發表されました。そして教授は、この資料が実は『プトンの仏教史』などに書かれている中国禅僧マハーヤーナとインド僧カマラシーラとの間で行われた有名な教義論争の漢文記録であることを証明されたのです。『頓悟大乘正理決』の中では一方は「禅僧摩訶衍」、他は「婆羅門僧」という書き方で出てきます。もっとも、この婆羅門僧がはたしてカマラシーラに相当するかどうかは疑問です。しかし、この資料が全体ではないにしても、いわゆる「チベット宗論」のある部分の記録であることは間違いありません。この資料の発見は各方面に衝撃を与えましたが、その重要なことの一つはチベット研究に実証的歴史的研究の道を開いたということです。それまでチベットの歴史は『プトンの仏教史』のような「チェージュン」と称する極めて伝説的な仏教史によっていたわけです。どこまで本当か潤色か分からないような記述を集めても、結局、本当の歴史は分からないというのが実状でした。それが敦煌出土写本という考古学的同時代資料によって実証的に検証することが可能になったのです。

七 歴史の脱落を補う

中国やチベットの歴史書に記録されているはずの重要なことが敦煌写本からはじめて分かり、従来の歴史理解に脱落があったということが確認できることがあります。たとえば次のようなことが分かってきました。

聖徳太子が「三経義疏」を書かれたということはご承知のことですが、その『勝鬘經義疏』に非常によく似た本が敦煌から見つかったのです。これまで、『勝鬘經義疏』は太子独自の著作とされてきました。中国にこの手本にあたるものが見えたらなかったからです。ところが敦煌の写本のなかには、いくつかの太子の時代前後の『勝鬘經』の疏の写本がありまして、その中の一つの「奈九三」という現在北京図書館に所蔵されている写本が聖徳太子の疏に非常によく一致するのです。後に「玉二四」もこれにつながるものであることがわかりましたが、とにかく全体の八割以上の文章が一致するのです。新聞がこれを「聖徳太子『勝鬘經義疏』のタネ本を発見」と発表しましたものですから、太子のイメージが壊れるということで大分物議をかもしました。しかし、このことは、当然といえば当然のことです。長安の仏教学が日本と敦煌という東西の両辺に伝わっていたということです。ただ、肝心の中国中原のところで資料が残っていないために、太子が独自に著作されたように思われてしまっていたのです。敦煌資料は、これまで見過ごしていた事実気づかせ、歴史の欠落を補ってくれました。

チベットの歴史の方でも、同様なことがあります。たとえば、敦煌から八二二年に時の贊普が支配下の各州に流布したことを明記する『大乘經纂要義』という文献が見つかりました。これは以後のチベットの仏教の方向を定める重要なもので、しかも全土に書写させて配布したのですから大変な数になったはずですが、しかし、このことについてチベットの歴史は何も記載しておりません。また、先に触れましたように、ティツクデツェン王のとき敦煌で『無量壽宗要經』と『大般若經』との大量写経をしています。このこともどこにも記されていません。

また、『楞伽師資記』などの禪典籍のチベット訳が敦煌から発見されて、チベットに中国禪が伝わっていたことが分かりました。そのことから、ニンマ派の教学に禪がとり入れられている経緯もだんだん明らかになってきました。従来は、チベット宗論で摩訶衍が敗退した後、チベット仏教はインド仏教一辺倒になり中国仏教、特に禪はチベットに残っていないと思われていたのですが、修正されることになりました。

八 仏教活動の実態解明

敦煌に保存されていた写本類は、実際に使用された生の資料ですから、その利用状態や成立経過など記録に残らないような具体的な様子を明らかにできることがあります。たとえば、敦煌より出土した『瑜伽論手記』や『瑜伽論分門記』の写本群によって、法成が晩年、大中九年（八五五）から大中十三年（八五九）の四年間にわたって沙州の開元寺で行った『瑜伽師地論』の講義の有様を、きわめて具体的に知ることができました。この時、講義を聴講した弟子の名は談迅、福慧、法鏡、一真、洪真、明照、恒安で、彼らが聴講したテキストやノートが遺っていたのです。ところが『瑜伽師地論』百巻のうち五十六巻のところまでで、その後のノートが見あたらないのです。法成の活躍年代から推定して、どうやらこのあたりで亡くなったに違いありません。六種類ある講義記録のノートを比較してみますと、同一の講義を弟子たちそれぞれが記録したのですが、記録の仕方の違いがでてくるのです。時には抜けているところがありますし、発音の同じ語を間違って写している場合もある。もし、これらを後世それぞれに出版したとしますと、法成は何回も違った講義をしたということになりましょう。天台大師の著作は弟子の灌頂が筆録したものであるといわれていますが、そのような講義筆録によって論疏が成立する場合の具体例を知ることができました。

九 周辺地域の仏教研究との関連

仏典の古写本は敦煌だけでなくトルファンなど中央アジアの古代遺跡からも採取されていますが、それらの中に敦煌出土の仏典に一致するものが屢々確認されます。たとえば、百済康義先生はトルファン出土の写本の中に窺基の著作である『法華玄賛』のウイグル語訳のあることを発見されましたが、この本は敦煌でもその写本が多く発見され大変流行していたものなのです。また、これも百済先生の発見ですが、ソグド語訳の『時非時経』があることが分かりました。これもその原本となった漢文本が敦煌写本の中に存在しておりました。ウイグル人やソグド人は仏教を取り入れようとして、漢文仏典からも翻訳していたのですが、かれらが重要と判断して採用するものは、大抵は敦煌でも流行しているもので、両者に共通性が見られるわけです。中央アジアの遺跡より採取される古写本の残り方はきわめて偶然的断片的ですし、また年代もなかなか判定しにくく、その仏典の同定や位置づけをすることがなかなか難しいのですが、敦煌出土の写本の方は大変数量が多く、年代の範囲もおおよそ限定できますので、編年的、系統的に大体の写本のあり方が分かります。中央アジアの仏典の流布は大体同じ傘下にありますので、敦煌以外の中央アジア出土の仏典古写本の素性を判定するのに、敦煌の写本のあり方は大変参考になるのです。だから、敦煌仏教の研究は、周辺地域の仏教の解明に関連してくるわけで、その意味からも重要であると言えます。

十 今後の課題

昨年（一九九〇）の十月に敦煌研究院で「国際敦煌学術討論会」が開催され、はじめて敦煌に行く機会をもつことができました。そして仏窟内を見せていただき実際の壁画の様子を知ることができました。そのとき、研究会に参加された美術関係の先生がたにもお会いすることができました。いま、壁画などは美術関係の先生がたが専門に研究して

おられるのですが、実はそのどれも仏教の題材のものですし、仏窟の莊嚴としてあるものです。先生がたは、インドの影響がどうの、中国の画風がどうのという専門の美術史の観点から関心をもたれているようですが、それらは仏教活動の中において意味をもっているもので、美術だけで独立して論ずるのでは不十分ではないでしょうか。そのようなことを申しますと、「その通りだ」と言われます。いままでは、仏教学と美術とが別々の関心から研究を進めていたのですが、両方は本来区別されるべきものではないでしょう。壁画を模写してこられました敦煌研究院の方がこのことを実感しておられまして、仏教を知らないと壁画も分からないと考えておられることを知りました。敦煌研究院でも仏教の分かる人を育てたいと所長の段文傑先生は言っておられました。各専門分野がバラバラにでなく、総合的に研究されることがいま要請されることです。

壁画について少し申しあげますと、私たちは敦煌の壁画というものを、たとえば『中国石窟』に収録された写真を通して見ていたわけです。つまり、特定の人が重要と思って選んで紹介されたものを通して見ざるをえないのです。しかし、実際はその他にもいろいろの壁画がありますし、それが描かれている周辺の状況なども壁画の意味を知る上に重要な意味をもちます。図版で紹介されたものはほんの一部で、しかも切り取られた場面なのです。特定の人の眼を通して選ばれた資料を対象とするかぎり研究がそれ以上進展するわけがありません。どうしても全体が対象とされなければならぬ。同様なことは写本研究の場合にもありました。マイクロフィルムによって敦煌写本の全体像が見れるようになって研究が飛躍的に進展しました。もつとも壁画の全体を見るためには、五年も六年も現地に居住することが必要になるかもしれませんが、そうしないと本当の研究はできないのではないかとことを思いました。その他、現在困っていることに敦煌写本の偽物の問題があります。敦煌の写本が求められるようになって、偽物がつくられて流布したことは今や隠しえない事実です。大谷探検隊が蒐集したもののなかにもそのようなものがあるようです。これは資料蒐集の際にどうしても起り得ることで、そういうものを求めた軽率を批判するよりも、私はそうい

う状況の中で資料を集めてこられた先人の苦勞をしのびたいと思います。ただ厄介なのは、そうした偽物を対象にして研究すれば、その結果が間違ってしまうということです。龍谷大学に理工学部が出来たことですし、科学的に真偽の判定ができないものかどうか、いま検討しているところです。

敦煌の研究は、単に中国の一地方の仏教の解明というだけでなく、次から次へと研究領域を広げてまいります。たとえば中央アジアのいろいろの民族に、仏教がどのように伝播し、どのような役割をしていたのか。また、地域や民族でどのような変容をしたのか。敦煌の地だけでなくても、民族の攻防、交替がたびたびあったにもかかわらず、その時その時に千佛洞が修復され、一貫して仏教が護られてきた理由は何であったのか、などにも関心が広がってまいります。

私が敦煌研究をはじめました頃、「そんな研究は、仏教学の主流ではないからやめておけ」と言われたものです。敦煌禪資料の研究者である田中良昭先生に先日お会いしましたとき、このことを申しましたら、「私も言われた」とおっしゃいました。まあ、私たち事の成行きで敦煌研究から足が抜けなくなってしまったのですが、やはり教学研究が仏教学の本流であるという意識は一般に強いようです。教学研究が仏教学の中核であることは当然ですが、写本などの物を対象とした敦煌仏教の研究のようなことも仏教学であるということを申ししておきたい気がいたします。

今まで仏教学は、実証的研究というものを殆ど経験しておりません。そういう分野は歴史学あるいは考古学の分野にまかせてしまっていました。これは、悟りへの学修を目指す仏教学の本旨からすれば当然の姿勢かもしれませんが、私たちのように実際の写本に触れながら研究を進めていますと、当時の人々の信仰生活の息吹といえますか、息づかいといえますか、それを明らかにすることも大切な仏教学ではないであろうかと思うようになりました。古代の仏教徒たちの語りかけを聞くように思えるのです。

また、私たちの仏教学は教学面のみを抽象して考えがちですが、敦煌資料の調査などをしておりますと、仏教が実

際に信仰され生きてゆくにあたっては、教学だけではなく壁画を描いた人も、写経をした人も皆な仏教への参加者であり、仏教はそういう人々の総合によって支えられていたのだということを思うのです。仏教学というものは、どれか一部だけが重要というのではなく、いろいろの研究分野が連携して、そうした全体像を明らかにすることを目標とするものでなければならぬのではないかということを、私自身の反省もこめて思っている次第です。敦煌仏教の研究は、そういう示唆を与えてくれるものでもあります。

きわめて大ざっぱなお話になってしまいましたことを、お許しいただきたいと思えます。ご清聴ありがとうございました。

(本稿は、一九九〇年十一月八日に行われた仏教学会の公開講演会における筆録を上山先生に加筆訂正して頂いたものである。)